

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】三添篤郎

【所属】(助成決定時) 筑波大学大学院人文社会科学研究所

【研究題目】

冷戦と音響学: ハーヴァード大学音響心理研究所の学術連携体制を事例として

【研究の目的】

本研究は、第二次大戦直後の合衆国で学問領域となった「音響学」(audiology)が、「冷戦」を構築するうえで、いかなる多面的な作用を与えたかを、横断領域的に解明する試みである。音響学は、大戦中の軍部や研究所における軍事研究の成果をもとに、1946年に学術領域として制度化され、冷戦期の科学技術開発に多方面に寄与した。しかし、このように戦後アメリカ社会へ流通することとなった音響に関する知識が、どのような研究体制から誕生し、冷戦構築に寄与したのかは、個々の通時的な技術開発史をのぞけば、意外なほど明らかになっていない。本研究は、音響研究の中心的位置を占めた「ハーヴァード大学音響心理研究所」(PAL)の学術連携体制に着目することで、音響をめぐる知がいかなる社会的要請や人的ネットワークから生成されたかを、歴史資料の発掘と検証によって浮かび上がらせていく。最終的に、「音響学」という学問領域の生成と「冷戦」という歴史構築の、諸関係性を多角的に明示することが、本研究の目的である。

【研究の内容・方法】

音響学という学問領域を、冷戦期特有の知識体系として捉え直すには、第二次大戦中から50年代の音響研究所や音響学者が残した資料を網羅的に収集する必要がある。そこで本研究は、2度にわたりアメリカ合衆国で資料の発掘と収集を行い、資料的基盤の充実を図る。

①PALの研究実態調査 1940年から72年まで音響学研究の中心的位置を占めていた「ハーヴァード大学音響心理研究所」において、大小34ボックスに収められた閲覧可能な資料の現地資料調査を行い、可能な限り複写・入手し、資料的基盤を充実させる。

②アメリカ政府・軍部の音響学への関与実態調査 米政府・軍部においていかに「音響学の知」が必要とされ、共有されていったかを調査する。ワシントンDCの米議会図書館・米公文書館において、原爆開発の中核を担ったOSRD、および米陸海軍の軍事資料アーカイヴを閲覧・複写する。また大戦前後の音響工学専門誌や科学雑誌も可能な限り入手する。これにより、大戦中から冷戦初期にかけて政府・軍部がいかにしてPALと連携体制を構築していたかを解明するための資料を整備する。

在外資料調査によって入手した資料をもとに、資料分析にうつる。政府・軍部・大学の音響学者が、どのような主義や目的を共有し、聴覚や身体の様態を定義づけていたかに着目する。軍産学連携体制は第二次大戦中から冷戦期における合衆国の知を支えた巨大プロジェクトであったため、音響学を冷戦初期の知識の分布図に定位する作業も不可欠である。そのため、軍産複合体制を科学社会史的・文化史的に論じた先行論を在外調査前に把握し、資料調査の精度を高める。方法論的視座としては、音や聴覚を歴史的構築物として捉え直す「聴覚文化研究」と、冷戦をそれ自体、文化や知の枠組みとして捉え直していく「冷戦文化研究」とを、有機的に融合させる領域横断的な視座を取る。

【結論・考察】

以上の資料調査により極めて実証的な観点から、音響学という知をめぐる時代状況を浮き彫りにできた。アーカイヴ調査によって、米国政府・軍部・民間企業・合衆国民などの極めて広範な領域の人々が、大戦直後からPALの誕生を歓迎する一次資料を、当初の想定以上に発掘できた。それに伴い、米国科学財団(NSF)からPALへの研究予算支給時期とその額も特定することができた。またJ・C・R・リックライダーなどの中心的な音響学者が取り結んでいた人的ネットワークは、50年代以降、電子コンピューター技術など、一見音響学とは無関係に思える領域にまで波及していく過程も明らかにできた。音響学という学問領域は、決して研究所や大学のなかで自律的に誕生したのではない。音響学という戦後の新参学問は、同時代の社会的・政治的文脈と密接に連動することで、「知識」として形成されたのである。